
動物たちのほのぼのライフ

玄武

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

動物たちのほのぼのライフ

【Z-コード】

Z2875Y

【作者名】

玄武

【あらすじ】

年を取らない作品。ほのぼのとした動物達の話です。

第1話（前書き）

動物がペットを飼つたりしています。

ここは、魔力や妖力の存在する世界。その魔力や妖力をもつて生まってきた者は、普通の学園ではなくその専門の学園に通う。

そしてこの世界には、様々な島国がある。その中で一番大きい国が総合国。主に力をもたない普通の人々が暮らし、普通の学園がある。その他の国で有名なのが、火の国、水の国、植物の国、虫の国、万能の国、機械の国、死の国、地の国・通称地国じじく、歌の国があり、これらの国に住む者は、何らかのエリートである。普通の人も体力をもつているが、それよりも多い、体の四分の一から半分以上をもっている者は、エリートでなくとも、これらの国に住むことが許可される。

国王、もしくは社長達の上に立つ、力の強い物を元帥、元帥よりも賢い者を大元帥と呼び、このような者は本名を隠し、仮の名を名乗り、本当に信頼している者などのみに、本名を明かすようになつてている。

それでは、ほのぼのライフ、スタートです。

「起きてくださいーー！滝波さん！」
たきなみ

フリルなどの付いていない、シンプルなエプロンをしたカンガルーが、ここ、水の国の王宮の王室でとても気持ちのいい、ふかふかのベッドで眠っているペンギンを起こそうとしている。

「滝波さん！」

「何だよーるさいなー。俺の腹時計はまだ夜の三時だよー。」

「それは狂つてますよー。」

「ほら見ろ時計を！」

時計はキツチリ三時を指している。

「素早く滝波さんがかえたんでしょう。」

「証拠はあるのか。証拠は。」

「あります。ほらこーこー、証拠写真が！」

そこには、明らかに時計を外して時間を変えているペンギン、滝波が写っている。

「チツ。バレたか。」

「チツ、じゃないですよ。」

「つむさいなあ。」

「学園あるんですから。早く行きますよ。」

「学園休む。」

「ダメです。」

「いいだろ。俺は最強なんだ！」

「ほらほら、行きますよ。」

「しょーがないなー。」

「ほれ、早く！』

渋々ながら、リムジンに滝波が乗ると、キコイイイイント派手な音を立てながら、タイヤが横になり、そこから空気が噴出され、総合国にある専門の学園、妖魔法学園へと飛び立った。

リムジンが妖魔法学園に降り立つとリムジンのドアが開き、中から仮面を付けた滝波が出てきた。

「じゃ、行ってくるなー。」

仮面をつけているのに、べべもつていなによく通る声で言った。

「間違えないでくださいよ。」
妖魔法学園には、幼等部、小等部、中等部、高等部、大学部そして、学園長室、幼等部長室、小等部長室、中等部長室、高等部長室、大学部長室があつて、幼等部、小等部、中等部、高等部、大学部は、それぞれの棟に分かれています。学園長室などは、また別の棟になっています。ここまでついてこれましたか？」

「頭が痛くなつてくるー。」

「まあ、続けましょう。そしてこれらの棟は、運動場を「の字を反対にしたようななかたちで囲んでいます。」

「「の字だと、一つ棒がたりないぞ？」

「最後まで話を聞いてくださいよ。それで、足りない部分には、今言つた棟が全てすっぽりと入るほどの森、迷いの森があります。その中心部に、天国近くまである巨大な木があります。」

「お前よく知つてんなー。」

「情報屋から聞きました。まあ、あなたが行くのは幼等部ですよ。」

第1話（後書き）

中途半端なところで終わっていますが、ご了承ください。
これの人間版もいつか書くつもりです。
次回もよければ読んでいただきたく思います。
読んでくださった皆様、有難うございました。

仮面を付けた滝波たきなみが、堂々と屋上に入ってきた。

「えーっと、ここが入園式の会場か。」

とても広い、学園長室のある学園長棟の屋上に、幼等部に入る2才の動物たちが集まっている。

（クマ、ペンギン、コアラ、ヒツジ、あれは恐竜か？ステゴサウルスのピンクと赤のバージョンか。ん？あれはまさかカツパか？ピンクが2人と赤のが1人か。頭が丸くて体がその半分の大きさってところか。ちっちゃくてかわいいなあ。他にも結構いるけどまあいいか。）

「まだ始まらねーの？」

そう誰かが言った時、

「じゃ、はーじめまーすよ。」

やけにハイテンションな化け猫が出てきて言った。その化け猫は、体と頭が同じ大きさで頭が猫、体がカボチャで、手足と尻尾がとても短い化け猫だ。手足が短いのでずつと足を伸ばして座っている。大きさは滝波を3人積んだほどもある。

「えー、私がこの妖魔法学園の学園長でーす。」

この時、その場にいた全ての者が耳を疑つた。

「あ、信じてませんねー。信じてくださいよー。」

本当にこのハイテンションな化け猫が学園長だと皆が分かったところで、入園式は終了した。

「ふー、終わつた終わつた。面倒くさかつた。」

「そこまで長くなかったでしょー。私ずっと待つてましたけど、それほどかかつてなかつたですよ。」

「カルガー、アイスあるか？」

「人の話を聞きなさい。あと、アイスありますよ。」

このカンガルー、名前をカルガーと言つ。

「よっしゃー。アイス、アイス～。」

また、リムジンが派手な音を立てて水の国へと飛び立つた。

「ここは、水の国の王宮。その王室で召使いのカンガルー、カルガーが国王である滝波たきなみを、起こしている。

「おーきーで、くーだーをーいーよーお。滝波さん。」

眠そうに目をこすりながらペンギンの滝波が起き上がった。

「んー。なあカルガー、国王は本名でいいんだぜ? なんで滝波なんだ? 水龍でいいだろ?」

滝波の本名は、水龍と言つらし。

「癖でそう言つてしまふんですよ。それより、学園に遅れますよ。」

「朝ご飯は?」

「そこにありますよ。」

と言つて指さした先には、馬鹿でかいテーブルの上に並んだものすごく美味しそうな料理があつた。

「この世界では、スズキと言つ魚がとても高級で、一五十万円もある。そのスズキの刺身が沢山並べられていたのだ。

「いっただつきまーす!」

普通にむしゃむしゃとスズキの刺身を食べ終わり、満足そうな水龍を見てカルガーは、

「じゃあ、学園いきますよ。」

と言つた。

学園に到着すると、少し迷つたものの幼等部の教室についた。

キンコンカンコン

と、チャイムが鳴つた。と同時に、大人のペンギンが教室に入ってきた。

「皆さん初めてまして。私がこのクラスの担任の先生です。よろしくお願いしますね。」

いきなり、ガラッと大きな音を立てて生徒の一人が入ってきた。

「すみません! おくれまして!」

最後まで言わせずに、先を尖らせたチョークをその生徒にすごいスピードで投げつけた。この世界は、殺された時だけ、生き返るようになっている。皆は、無言でチョークを投げつけた先生から、目が離せなかつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2875y/>

動物たちのほのぼのライフ

2011年11月24日18時48分発行